2014年度版　ぴ～すけハイスクール

# 語り継ぐ災害体験

－高校生による「聞き書き」地域防災－

宮崎公立大学ネットワーク研究室
NPO法人みやざき教育支援協議会

# はじめに

宮崎公立大学 教授　辻 利則

東日本大震災から４年、災害公営住宅の建設はまだ計画の２割弱、現在もなお２０万人以上の人が仮設住宅などで避難生活を余儀なくされています。一方、４０年かかると言われる東京電力福島第一原発の廃炉作業ではトラブルが続き、その遅れが心配されています。同時に復興がなかなか進まない中、震災や原発事故への関心が薄れていく「風化」も懸念されます。

宮崎県で心配されるのは南海トラフ地震、今後３０年に起こる確率が６０％から７０％と非常に高い確率が示されています。海溝型地震は１００年から１５０年の周期で生じ、「今後３０年」というのは先の南海地震（昭和南海地震）が１９４６年に起きたからです。今年は太平洋戦争の終結から節目の７０年ですが、昭和南海地震からの年数（６９年）もほぼ同じです。

いつ起こるかわからない災害、明日、数年後、いや数十年後、数百年後と将来に亘って考えていると、「自分はいま何をしたらいいのか？」「自分には何ができるだろうか？」「どう生きたらいいのだろうか？」などと不安に思うことがあります。東日本大震災からの復興、次に予測される南海トラフ地震、それぞれ３０年～４０年後の話で、「わがこと」として考えることは難しく、当然のことながら世代ごとにそれぞれ考え方は異なります。

そこで、本プロジェクトでは「地域」に着目し、災害に強い地域づくりについて、高校生を中心に様々な世代が集まり話し合うことにしました。災害への対応は、公助（行政）に頼らない自助、共助が大切ということもあり、日頃の地域活動についても考えました。地域には少子高齢化による様々な問題もあり、災害時だけでなく普段からの地域のネットワーク（絆）が重要であることを再認識しました。さらに、ハイスクール・カフェ（熟議）では、話し合うことの面白さを皆さんが経験できたようです。

本書は、このプロジェクトの中心である県内の高校生、顧問の先生、取材に答えて頂いた住民の皆様、そしてハイスクール・カフェに参加した皆さん、またこの活動を中心になって支えていただいたNPO法人みやざき教育支援協議会、宮崎公立大学ネットワーク研究室の学生の皆さんの熱意によって完成したものです。ぜひご覧になり、若者の力を感じていただければ幸いです。

なお、本企画は宮崎市学術研究振興助成金の地域貢献研究事業として実施されたものであり、ここに記して感謝の意を表します。

# 高校生による聞き書き地域防災

## もくじ

1.　はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

2.　避難できなかった（高千穂高等学校）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

3.　早めの避難で死亡者ゼロ（高千穂高等学校）・・・・・・・・・・・・・・・ 6

4.　とにかく逃げてきなさい（本庄高等学校）・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9

5.　動物たちの安全を（宮崎日大高等学校）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13

6.　お買い物プログラム（宮崎大宮高等学校）・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15

7.　どこかわからないくらい水が（宮崎大宮高等学校）・・・・・・・・ 16

8.　外国人からみた防災（宮崎大宮高等学校）・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18

9.　有線放送を聞きながら（飯野高等学校）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20

10.　もう泣きそう（飯野高等学校）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22

11.　火柱があがった（飯野高等学校）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24

12.　灰をかぶって（飯野高等学校）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26

13.　第１回熟議「ぴ～すけハイスクール・カフェ」･････････････ 28

14.　第２回熟議「ぴ～すけハイスクール・カフェ」･････････････ 42

15.　「ふれあいぴ～すけ」･････････････････････････････････ 54

16.　実施要項･････････････････････････････････････････････ 57

17.　「聞き書き」の流れ･･････････････････････････････････ 59

18.　「ぴ～すけ」について･････････････････････････････････ 60

19.　参加者、協力者一覧･･････････････････････････････････ 61

20.　あとがき･････････････････････････････････････････････ 62

# 避難できなかった

高千穂高等学校　№1

私たちは平成１７年の台風１４号の被害について調べてみました。私たちの通う宮崎県立高千穂高等学校は西臼杵郡の３町（五ヶ瀬町、高千穂町、日之影町）に住んでいる生徒がほとんどです。そこで台風１４号によるそれぞれの地域の被害状況とその後をまとめて、比較してみたいと考えました。

平成１７年９月６日の土砂崩れ（高千穂町土呂久）

【聞き書き】

平成１７年９月６日、台風１４号の影響による激しい雨によって朝９時頃、避難を始めている途中に山の斜面から直径２メートルの大岩が落下しました。その岩は道路を半分破壊したため、避難の妨げとなっていました。

そのような状況の中で、高千穂町岩戸地区土呂久の畑中地区と南地区の２か所で土砂災害が起きました。その時までに台風１４号の影響による長雨で降雨量は１０００ミリを超えていました。当時、土呂久ではその長雨により川が氾濫し、道路が冠水していました。すごい状況でした。

そんな中で、地元の消防団、自衛隊、総勢３００人を超える人で救助に向かいました。畑中地区で起きた土砂崩れの救助活動は１０時くらいに終わりましたが、その方は亡くなっていました。そこから南地区に向かい、重機や消防などで使うポンプ車で、給水に当たり行方不明の一家４人全員を探し出しました。

ですが、全員亡くなってしまいました。その後、私たちの家族は岩戸地区にある小学校に避難しました。そこには水や食料などが用意されており、たくさんの避難者が支給品を受け取っていました。

また睡眠時は、マットの上に寝ました。次の日、家に帰ると家は無事でしたが、周りの木や竹が倒れており、田に植えてあった米や畑の野菜も被害を受けました。近所の人や家も無事で、さらなる被害の拡大はありませんでした。

【感想】

台風１４号により近所の方々の名前や家族構成などを把握した上で、今後の台風などの自然災害により避難する場合、近所の方への声掛けや安否確認をするなど、近所の方々との日ごろからの交流がより一層濃いものになっていると思います。

話し手：佐藤　様（男性、４３歳）
聞き手：佐藤　柊士、中嶋　未夢
場　所：高千穂町土呂久
取材日：平成２６年１１月３０日

# 早めの避難で死亡者ゼロ

高千穂高等学校　№2

【聞き書き】

日之影町は五ヶ瀬川に沿って住宅地が密集しており氾濫による被害がとても大きかったです。

私たちは平成１７年の９月６日に台風１４号による川の氾濫で避難を強いられました。台風が宮崎に上陸してすぐは激しい雨風が続いていました。川の水位が上昇し危険だと感じ、そのうえ町内放送や消防団からも避難の指示があり近くの日之影温泉駅へ避難することにしました。

指定された避難場所は別の所だったのですが、自宅から一番近い高台である駅に家族で向かいました。食料は温泉駅にあったカップラーメンなどを食べていました。夜になっても雨風は収まらず、翌朝には水位は前日よりも上がり、家にある必需品を取りに行った際は移動に苦労しました。水位が危険水位を大きく上回り、川に水を排水する側溝から水が吹き出していました。

その後向かい側の山から木が折れるバキバキといった音がし、見てみると山が土砂崩れをおこし住宅を巻き込んでいました。

土砂は付近の住人の避難場所である日之影小学校を間一髪すれすれで流れました。幸いその住宅の住人はその日之影小学校に全員避難をしており無事だったそうです。

高千穂鉄道の鉄橋は変形し、押し流されるほどの激流で、台風が過ぎ去ったあとは道路に木の枝やゴミ、発泡スチロール、原付バイクなどが散らばっていました。

その後、地域の人たちと協力してゴミ、民家の中に入った泥や割れたガラスの撤去作業を行いました。その際は地域の人達総出で、一軒一軒給水車で水を出しながら、泥などを掻き出しました。ほとんどの家が一階まで水に浸かっていました。

ある家では車のガソリンが泥と一緒に溜まっており、作業が困難なところもありました。時間と労力がかかりましたが地域の方々と協力し、いざというときに必要になるのは地域の絆と町の早急な対応だと改めて実感した出来事でした。

その甲斐あって日之影町では台風１４号による死者数は一人も出ませんでした。日之影町は高齢者が多い町ですのでこういった地域の中の信頼関係と町と住人の連携が重要になっていくのだと思いました。

話し手：岩本　様
聴き手：甲斐　翔太、岩本　雄太、穴山　百華
場　所：日之影町下日之影地区
取材日：平成２６年１２月

【感想】

今回私たちは近年で最も大きかった平成１７年の台風１４号の被害について、高千穂町、日之影町で聞き書きを行いました。

高千穂町、日之影町は他と比べて山が多い地域であり、土砂崩れによる被害が大きかったです。高千穂町では全地域で避難勧告が出されていましたが、高齢者や移動に困難な方々が避難することができず、犠牲者を出すという最悪の結果を招いてしまいました。

一方日之影町では、過去にあった台風による被害が大きかったため、独自の災害マニュアルを作成し、次の災害に向けての対策をしていました。また、避難勧告をより浸透させるため、発令タイミングを早めたそうです。

その結果、避難誘導に費やす時間が増え、避難していない世帯すべてを消防団員が回ることができ、死者が一人も出ませんでした。

このことから、台風などの水害には、事前の準備や対策、定期的な訓練、だけでなく避難勧告を出すタイミングを見極め、できるだけ早く勧告することも重要な要素であると感じました。

現在日之影町は、その後の災害に備え河岸の補強工事や住宅の底上げを町の事業として行っている最中です。

しかし、このことで将来災害が全くなくなるわけではありません。災害において一番重要なことは住民一人一人の災害に対する備えと意識の高さだと痛感しました。

また、高齢者の多いこの西臼杵郡内で避難をしなくてはいけない状況になったとき、私たち高校生の力は大きな力となります。

何かあったときには地域の力になりたいと思っています。

これから私たちは、社会に出ていくにあたって様々な災害に会うことがあるかもしれません。そのとき今回調べて分かったことを生かせるようにしたいです。

# とにかく逃げてきなさい

本庄高等学校

皆さんは２００５年の９月５日に、何が起こったかご存じですか。私たちは、そのとき小学校の２年生でした。幼かった私たちですが、この災害のことは、今でも鮮明に覚えています。そのときに、多くの人たちが災害から身を守るために、身を寄せ合い避難したお寺の住職さんに話を伺うことにしました。

【聞き書き】

〔住職のお話〕

昼間は普段通りの景色だった大淀川の水がだんだん増えていき、上流に降った水がだーっと流れてきました。いつも見慣れた景色がどんどん変化していき不安でしたね・・。

この寺の下の辺りは柏田という地区で、少し土地が低い場所です。この寺は、周りに比べて標高が高いと言うこともあり、何かあったときには、この場所に避難するという意識がこの地域の人たちの意識にはあったようです。

夕方の７時ごろに避難してきた人の数は１０人程度で、その方々を庫裏に案内しました。その中には体の弱い方やお年寄りの方もいました。市役所や消防からもこの寺に避難所としての要請がありました。

夜、１１時、１２時ごろの真っ暗な時でしかも雨が降っていたので、みんなびっしょりになって大変だったようです。まだ、台風が最接近していたわけでもないのに大淀川の水は満杯になっていました。

避難されてきた人を、最初は庫裏に案内しましたが、その後奥の部屋、そして本堂まで案内しました。朝には、その数が１５０人にもなっていました。

〔典生氏・井上氏のお話〕

私は、この地区の自治副会長をしていて、地区の見回りや避難の誘導をしました。水がどーっと家の中に入ってきて畳の上辺にすぐ上がってきたと地区の人から聞いた。

いよいよこりゃいかん・・・ということで人が寺にやってきた。お寺の階段は急なのでお年寄りはなかなか一人では大変だ。そこで、何回もそんな人たちを負ぶって寺まで連れてきました。

住職も大変やったと思うが、坊守は、本当に大変やったと思うわ・・・

〔坊守のお話〕

（日記を見ながら、私たちにお話をしてくださいました）

寺には、日頃から一斗以上備蓄米を用意してあります。朝は、その備蓄米でおにぎりを作りました。大きな釜で２回は炊いたと思います。寺のみんなと協力してくださったみんなで作りました。

急いで作ったからか、中に塩辛いのもありましたね（笑）夕ご飯は、寺にある材料を使っておにぎりと豚汁を作ってお配りしました。

その後は、市役所から食事が届きました。この寺で２晩、過ごしたかたもいらっしゃいます。数は、１０人から５人に減り・・・。皆さん、感謝してくださって、またお寺の掃除にも来ますと言って下さった方もいらっしゃいました。

しかし、その後は来られませんでした。家に帰った後、その家の片付けが忙しかったんでしょうねぇ･･･。それほど被害の状況がひどかったのだと思います。

寺は、日頃から備えている食料があり水（井戸水）も出て、電気も使えたので何とか大丈夫でした。ライフラインが大丈夫だったから助かりましたね・・・。

亡くなった母から、昭和２９年ごろにも大きな災害があり、お寺に避難してきた人がいると聞いています。お寺は、困った人を救うんですね・・・。

「避難場所となっている時に嬉しかったこと」ですか・・・避難してきた人の中で、ご主人を亡くされて四十九日を終えていない人がいましてね・・・食べ物をなにも召し上がらないので心配しました。家にヤクルトがあったので、これなら喉を通るのではないかと思い、その人にあげたところ、「ありがとうございます。おかげで元気がでました」と言ってくれました。その言葉を聞いて、とても嬉しかったです。

〔住職のお話〕

「地域の高校生にして欲しいこと」ですか・・・まずは、高校生にきちんと日頃から訓練を受けて欲しいですね。それも、グループでの活動がしっかりできればいいとおもいますねぇ。

そんなときには、お年寄りは体を壊すからなぁ。高校生みたいな若い人たちが、真っ先に逃げたら話にならんもんなぁ・・・。そして、やっぱり自発的に動くことが大切ですね。

日頃からグループで活動して、力を合わせて助けてあげる必要があるよね。被害が起こっているところは、力が必要やわねぇ。女性は、みんなを元気づけるような心配りがあるといいねえ。

〔自治副会長〕それから、ボランティアについてですが、この前の災害時には、ボランティアに来た人たちの中に、被害者用のお弁当を食べて帰った人がいました。ボランティアは、自分の食べ物ぐらいは自分でもってこないといかんのになあ・・・。ボランティアの意識が欠けているのではないか。ボランティアとはなんなのか考えんといかんような気がしますねぇ。心構えが必要でしょうね。

〔住職のお話〕

最近、南海トラフのことが盛んに心配されるようになってきた。だから、檀家さん達には、「とにかく逃げてきなさい。直純寺を待ち合わせにしなさい。」と言っているんですよ。

寺は、食事や衣類の準備はできないが、今は、公的機関がすぐに動いてくれる。場所は、提供できるからね。

昔から寺は心のケアーをするところだからね。助かった、助かったと行って寺を降りていかれた人もいたね・・・。災害は、人間にも責任があるからなあ。

【感想】

私たちは小学生だったので、周りの人から助けられる立場でしたが、今は、高校生となり、人を助ける力を持っています。その力を、大変なときにしっかり生かせるよう、日頃から意識して行動したいと思いました。

また、普段は、お正月の時や法事の時、そして観光のときしかお寺に行ったことがなかったのですが、「お寺」が地域にとってとても大切な存在であり、心のよりどころであることを改めて気づきました。

【話し手】

直純寺（浄土真宗本願寺派）住職、前川孝純氏、坊守（妻）、前川璃代子氏

柏田地区副会長（Ｈ１７当時）、前川典生氏、柏田地区在住、井上延美代氏

【聞き手】長谷川雪菜、海老原太一、小野原貴之

【場　所】宮崎市柏田「直純寺」

【取材日】平成２６年１２月５日（金）

# 動物たちの安全を

宮崎日大高等学校

東日本大震災の時、人間だけでなく動物も被災したということを知った私たちは、学校がある住吉地区の宮崎フェニックス自然動物園を訪れました。そこで私たちは、普段の動物の対応や、訓練の実態などについて園長さんに取材させていただきました。

【聞き書き】

普段、外に出している動物は夜や大雨の時には、お家に引っ込めています。
休園日には飼育スタッフだけが勤務していて、平日の夜は警備員しかおりません。
夜に何か起きたとしても人がいると危ないんですよね、暗かったりして。
パニックというのはすべての動物が突然起こしてしまうわけですから、私たちもどういうふうになるかわかりません。

先週、定期で決まっている防災訓練をやりました。
そのときは地震が起きて津波・火災が発生するという想定で行い、予定通り終了しました。
訓練は火事が発生してから、まずお客さんを高台に避難させる組、消火をする組、動物の様子をチェックする組、動物を収容する組に分かれて活動します。
１０分経ったら津波がくるおそれがあるので避難勧告が出たという設定で職員も避難します。途中でけが人が出て担架で運ぶ訓練もしました。
動物園には“ワニガメ”という危険動物の中でも特定動物という部類に入っているものがいます。

そのワニガメがいる池に津波が来たときには、津波がちょうど池の高さくらいになる恐れがあるので、一応箱に入れて高台に持っていく訓練をしました。

ここは特に指定の避難所にはなっていないので、非常食などの設備はありません。ですが、高いところで標高２３メートルほどあるのでお客さんを一時的に受け入れようとは思っています。

周りには住吉神社などの標高が高いところもありますしね。

もしお客さんが避難してきた時、園内の飲み物や食べ物があれば提供もできるかもしれません。

今回の避難訓練での課題は火事においても地震においても出てくるわけですが、どちらにも通して言えたことは、どうやってより効率よくコミュニケーションをとるか、連絡をとるかなどです。

話し手：出口　智久　様　【園長さん】（男性、６１歳）
聞き手：大石佳奈美、後田望来、寺原綜士、黒木裕介
取材日：平成２６年１０月１７日（金）午後５時から
場所：宮崎市フェニックス自然動物園

【感想】

私たちは初め、動物園が海に近いので津波の影響を多く受けるのではないかと思っていましたが、今回の取材で災害時の対応が考えられていることに安心しました。

その対応では、園の職員だけでなく私たち入園客も動物のことを考えた行動が求められていると思いました。

また、動物園などの公共施設は、地元市民だけでなく観光客も多く訪れます。このような公共施設で私たち高校生が災害にあったら、周りに配慮した行動をとりたいです。

# お買い物プログラム

宮崎大宮高等学校　№1

私たちは、障害者福祉サービス事業所のどんこやさんから、災害に関する話を聞きました。どんこやは、障害者の方が集まってアート作品を作る、福祉サービスの事業所です。

【聞き書き】

ここは、特に大きな災害に見舞われた事はありません。

しかし、これからの災害に備えて、半年に 1 回の割合で避難訓練をしています。これは、台風や津波を想定したものです。

避難先は、近くの公園やスーパーですが、このスーパーでは月に 1 度お買い物プログラムというのがあり、そのときスーパーにお願いして、お買いものついでに屋上に避難させてもらっています。

障害者の方のための事業所なので車いすの方が多いですが、みなさんアクティブで色々な場所に出かけているので、避難するときに苦労することはありません。

電動車いすの方は、自力で移動しますし、手動の方の移動も、事業所にいる職員だけで十分足りるので、1 回で避難できます。

避難訓練以外に地震の備えとして、棚から物が落ちてこないようにしています。棚にはたくさんの作品があるので。この備えはまだ完璧ではないので、今月中には終わらせようと思います。あと、ハザードマップなどは目がつくとこに置いています。

話し手：H・T さん（男性・34 歳）
聞き手：松澤美也、石橋里彩、松原圭祐
場　所：どんこや
取材日：平成 26 年 11 月 14 日

# どこか分からないくらい水が

宮崎大宮高等学校　№2

私たちは、平成 17 年の台風 14 号で大きな被害を受けた、大淀川沿いにある和保育園の方から話を聞きました。

【聞き書き】

台風 14 号が近づいていたとき、私は 1 人、保育園に残っていました。

すると、夜の 9 時頃、家から私を心配する電話があり、保育園は何も心配ないと、そのときの台風の状況から判断し、その日は保育園を後にしました。

翌朝の 5 時半頃、避難しないといけないらしいと、近所の人から電話がありました。話によると、消防車が避難勧告をしていたらしいのです。

私は、その消防車に気づきませんでした。それに消防車は、普通にスピードを出していたため、避難のことも聞き取りにくかったそうです。

その後、避難の事を聞いたわたしは、慌てました。どこに避難するのか、いつ避難するのか、何を持っていくべきかという様なこと考えていたのです。そして、高台にある小松台小学校に避難しました。

そのとき、正直私は、避難する必要はほんとにあるのか？と思っていました。

しかし、午前 10 時頃、小松台小にいたとき、２階に上がってください、と言われ、言われた通りにしました。・・・驚愕しました。２階の窓から私が住んでいる地区を一望してみると、そこはもうどこか分からないくらい水が流れ込んでいたのです。

保育園には、右上の写真で示しているところまで水がきました。右上の写真は、保育園の１階の靴箱です。その時氾濫したのは、大淀川の支流の大谷川でした。

その後私は、小学校に泊まるのが嫌で、親戚の家に行きました。途中の大淀川の堤防と平和台大橋は通ることができましたが、野次馬が多く、車は中々進みませんでした。

水が引いた後の片付けが大変でした。保育園の片付けには５日間かかり、ボランティアとして高校生も手伝ってくれました。

これからの災害に備えて、避難訓練は、毎月１回行っています。しかし、訓練するからこそ課題も見えてきます。園児を連れて小松台小に避難すると、45 分もかかってしまいます。記念病院までは、15 分かかります。だから、そのときの状況に応じて、病院に避難するか、保育園の 2 階に避難するか決めようと考えています。

話し手：日高和子園長先生（女性）
聞き手：松澤美也、石橋里彩
場　所：和保育園
取材日：平成 26 年 11 月 28 日

【感想】

今回は、2 か所訪問し、様々な話を聞くことができました。障害者の方、小さな子どもを抱える施設の方に、話をうかがえたことは、とても貴重な経験になりました。

# 外国人から見た防災

宮崎大宮高等学校　№3

私たちは宮崎大宮高校の ALT の先生、サマンサ先生に災害についてインタビューを行った。

【聞き書き】

① 災害が起こったときはどうしますか？

正直、何をすればいいか分かりません。ボランティアをしたいが、言葉の壁があるので難しい。

② 日頃どのような対策を行っていますか？

玄関に「非常用持ち出しセット」を置いています。中には、水や懐中電灯、救急箱を入れています。また、地区の公民館の方が避難経路を教えてくれました。

③ 災害が起きた時、何が 1 番困りますか？

病気や孤立することが一番怖いです。昔、ある男性が災害が起こった際に病院に取り残され、食料や水が無く、災害が起こった数日後に死体で発見されたというドキュメンタリー番組を見た。その男性は、病院で孤立してしまったために亡くなってしまったので、言葉が通じない場所で、もし孤立してしまったら怖い。

④ 何か災害対策用にほしいものはありますか？

英語で書かれたマップや災害対策アプリ、wi-fi の接続できる場所がほしいです。

以前の携帯で、地震予測アラームが鳴ったことがあるが、日本語だったので分からなかった。現在は、英語の災害対策アプリを入れています。

⑤ 出身地、カナダではどのような対策をしていますか？また、日本との違いは何ですか？

日本の方がカナダに比べて、災害に対する意識は高いです。しかし、東北大震災のときはもっと協力できたのではないかなと思います。

カナダでは、災害が起こった際に日本よりも早く警察や消防の方が動いてくれます。また、カナダでも日本と同じように避難訓練があります。

しかし、カナダでは、避難ベルの音が地震・火事などの種類によってベルの音が違います。また、大宮高校は「この時間に避難訓練をします」お知らせするが、カナダでは、お知らせせずに避難訓練をします。なので、生徒はいつ来るか分かりません。日本でも導入すればいいと思います。

話し手：サマンサ先生
聞き手：仁田脇・河﨑・樋渡
日時：平成 26 年 12 月 4 日
場所：宮崎大宮高校

【感想】
今まで、考えてこなかった外国人の視点で防災を見つめることで、より日本の災害対策を良くすることができると思います。

# 有線放送を聞きながら

飯野高等学校　№1

平成 18 年　九州南部豪雨災害（鹿児島県湧水町）　（平成 18 年 7 月 22 日）

【聞き書き】

駅からの雨がどんどん流れてきて、こっちのほうが低いので。もうなんか、えーって、すごいよねって思ってたら、家の中で１時間ぐらいはご飯食べたりして。

でも、なんか変な感じ、あんま降るよねって思ってたんですよ。そしたら、放送が。町の有線放送で、こう…雨が今どういう状況で、もうなんか…。避難勧告を聞いてたら、えって。おじいちゃんとおばあちゃんがそこにいるんですよ。そばに住んでて、当時は 70 ちょっと過ぎぐらいですかね。ですけど主人のお母さんのほうが、それこそ透析をしてて、それがまた原因で骨折をしてですね。ちょうど歩けない状態だったんですよ。

で、心配な時期ですね。主人も力がある中学校２年の野球部のお兄ちゃんも本来はいるのにですよ、朝早くから鹿児島の試合に行ってるし、で私が一人だったので、その有線放送を聞きながら、いや～なんか変な感じとか思いながら、外に出てすごいもう雨なんですよ。

おじいちゃんとおばあちゃんがいるので、このおばあちゃんたちを、ちょっとどうにかしないといけないと思って考えてたら、役場がそこにあるので、役場の職員の人たちが２人ぐらい合羽を着られて、すぐ来られたんですよ。

高齢者とか近場の人たちの誘導だったと思うんですけど、「津久江さん、おじいちゃんとおばあちゃんをちょっと高いところに避難をさせてください。」ということで。「ここから高いところっていったらどこですか」ったら、「駅のほうとか JA さんとか」って言われたので、で、すぐおじいちゃんとおばあちゃんを、おばあちゃんは役場の職員にからわれて、車に乗せて、避難をさせました。

それからあと、ワンちゃんも繋いでたんですよ。犬も、もうすっごい雨なので、私も初めてのことで、「すみません、生き物とか犬とかどうしたらいいんですか」ってきいたら、「犬もね、もう放しなさい」って。「鎖も外しなさい」って。

「この状況だと、昼からだから夕方、夜にかけてどうなるか分からないから、犬ももう外してください」って言われたので。生き物だし、この雨の中どこに行くけとか思ったけど、繋いでもどうなのけってもう分からないので、状況としては、聞いて言われるとおりに、「ごめんね。外すよって、どっか逃げなさいよ」って外したんですよ。

人の命っていうのが一番肝心なので、まずおじいちゃん達を避難させて。放送に従って、自分も避難せえって言われるし、行かないと。

あ、車は2台とも駄目になってしまったんですよ。でも、私なんか車を高いところにやったこともなかったし、車もねえって思ったけれども、やっぱり人命優先でしたよね。

話し手：津久江　真澄美さん
聞き手：小牟田　啓子
場　所：鹿児島県湧水町
取材日：平成26年7月

# もう泣きそう

飯野高等学校　№2

平成 18 年　九州南部豪雨災害（鹿児島県湧水町）　（平成 18 年 7 月 22 日）

【聞き書き】

片づけは有難いことに息子が鹿児島の野球のチームなので、私たちは父母会長をしていたんですよ。それで、鹿児島のほうからのお父さんお母さんたちが、父母会長の家が水害にあったということで、もう連絡がパーッとはいって、日曜の朝にチーム全体からきて。

野球部の子たちは皆、荷物を出す作業。おじいちゃんの家のほうは、今度は主人の職場の人たちが皆来てくれて。多人数で全部、一日で出しました。人数がいないとこれが出来ない…。５０、６０、何十人来てくれました。それで、父母会のお母さんたちは、そのあとも何日もお弁当を持ってきてくださいました。

１日目はとにかく全部出して、くさいし、泥も入ってるし、畳は交差してるし、ひっくり返ってるし…。もう泣きそうでしたね。１日目が終わる頃には、シロアリ駆除とかされている知り合いの方がすぐ来てくださって、床上消毒とか…。いろいろな知り合いの方が道具を持ってきてくれたりして、洗い流して扇風機をところどころに置いて乾かして。

だから１日で、大きな荷物はほとんど出しましたね。人手のおかげですね。野球部の子供たちは中学生で、重たいものを持ってくれるのは有難かったですよ…！お母さんたちは洗い物をしてくれて、「津久江さん、これ捨てるの？」「いやぁ、それいるね」って言えば「洗うね」って言ってくれて。

お父さんたちは重たいものを出して捨てるものを分けたりとか。ごみの処分は、その時は、家の前に出していいってことで。異様な感じでした。もう分別とかいってたら皆、文句を言いますよね。こんな時になにが分別よって。車が来たりしますからもうとにかく何でもいいから、自分の家から出すものは出してくださいって言われました。そういう状況ですよね…。

食事とかは、ここの周り皆、被害に遭ってるからもう精一杯なんですよ。A コープも水害に遭ったんですけど、経済連のほうから応援が来て、それこそお店がないとここら辺の人たちが不自由だって思われたと思うんですよ。

で、一日ぐらいで復旧しましたもんね、役員がいっぱい入ってきて、品物を並び替えて、衛生面で掃除をして、お昼ぐらいからはお惣菜が並びました。弁当が。皆、台所は使えない、IH も使えない、水も使えないわけだから、もう弁当とお惣菜がすごく助かりました。

だから、夕方になったら皆お弁当を買いに来るのと、お風呂が入れなかったから、お風呂は券をくださいました。水害に遭っていないところの温泉に入りに行ってくださいってなっていました。でも、券を貰っても遠くて行けるはずないよねって話になっていたりもしました。

話し手：津久江　真澄美さん
聞き手：伊福　江利子
場　所：鹿児島県湧水町
取材日：平成 26 年 7 月

# 火柱が上がった

飯野高等学校　№3

平成 23 年　新燃岳噴火（高原町）　（平成 23 年 1 月 26 日）

【聞き書き】

ちょうど 1 月 26 日に噴火して、初めて皆さん見られたと思うので、びっくりしたと思うんですけど、夜ガタガタってドアを叩くような振動（空振）とかで山を見れば、溶岩の火柱が上がったりして、やっぱり狭野の山に近い人たちは「避難をさせてくれ」っていうのは、初日からきてですね。

また日を追うごとに増えてはいったんですけど、ちょうど 1 月 30 日の日に溶岩ドームが急成長しているということで、レベルをちょっと上げるような話も入ってきたもんですから、夜 11 時 50 分に避難勧告ということで出したんです。

ほほえみ館の方を避難所として、あと近くの公民館、体育館もですね。結局５１３世帯、１１５８人に避難勧告を出したところです。避難勧告の周知は、地元の区長さん班長さん、消防団、警察の方とか皆さんの協力で誰も怪我なく避難ができました。

着の身着のまま来られた方が多かったですね。牛などの家畜も避難してもらいました。えさをやろうと避難勧告の地域の牛舎に農家の方が戻られると 2 次災害の恐れがあったので、小林市の市場とかですね。ちょうど空いてたりしたもんですから、全部牛を避難させて、そちらにえさを食べさせに行って頂いてって状態ですね。

ただ頭数が避難できる範囲だったので、良かったのですが、もっと範囲が大きくなると、分散は大変だと思いますね。あとペットとかの問題はありますね。

避難所のほほえみ館は、一応福祉避難所の指定も受けていてトイレやシャワー、調理室、空調施設もあって、施設としては良かったと思います。

ただやっぱり困ったのが、間仕切りとかですかね。顔見知りだといいんですが、町内でも知らない者同士だと、やっぱり気を遣ったりとかあったみたいですね。

あと敷くものですね。最初毛布みたいなものを敷いてたんですが、床がちょっと固いですから、柔道なんかの畳ですね。あれを持ってきて敷いたりしました。テレビやラジオも用意しておくといいかなと思います。

電話なんかも、ＮＴＴさんがすぐ、3 台位廊下から話せるようにして下さいました。仮設のお風呂もですね、民間の企業さんが外にテントを張って、いっぺんに 10 人近く入るようなものを用意して頂きました。

あとは町内の温泉の方々も送迎バスを出してですね。温泉に入って頂くようなサービスをしてくださいました。あとは個別の会議室を利用して、ベットが必要な方や車いすの方が過ごせる部屋を設けました。

西諸の看護協会からも看護師さんが来て下さって、健康診断みたいなものをしていただきました。ボランティアの方々には灰の除去作業や救援物資の仕分けなんかをして頂きました。救援物資では、やはりサイズが関係するものは難しいですね。

例えば雨靴とかは消防団員の方に配布したんですが、２３ｃｍなどは男性にはちょっと合わなかったですかね。

話し手：瀬戸山幸一さん
聞き手：櫻井　美咲
場　所：宮崎県高原町
取材日：平成 26 年 8 月

# 灰をかぶって

飯野高等学校　№4

平成 23 年新燃岳噴火（高原町）（平成 23 年 1 月 26 日）

【聞き書き】

噴火の被害というのがですね。一応大枠でしかないんですけど、例えば、しいたけの方は、灰をかぶって売り物にならないということで全廃したりとかですね。いろんなものを合わせて約 1 億円くらいの農林業の被害がありました。

それと道路の方も高原の祓川からあっちの霧島に抜けるところですね。あれも通行止めを高原町と都城市でかけたところです。あと高原のサンヨーフラワー温泉が休業されてそのまま営業をやめて、今はもう開いてないです。

あと小さな噴石ですね。車のフロントガラスが壊れた被害が 15 件、屋根に取り付けた太陽光パネルや温水器の被害が５４件上がってますね。高原は畜産農家も結構あるもんですから、畜舎のプラスチックのあとスウェットというかトタンとかそういったものの被害が２３件ありました。

あとビニールハウスの農業ですね。これも 2 件。花とか苗を作る露地栽培が 1 件。住宅の屋根の被害が 1 件。それ以外にも皆さんの家の中に灰が入って片付けは大変なものでした。燃やせないゴミの埋め立て地に最初持って行ってましたが、すぐいっぱいになりました。灰の処理先も大量に出るので改めて考えておかないといけないですね。

その後の対策としては、国の方もまた砂防ダムというか土石流が来たときにせき止めるものを建設してもらっています。花堂地区、祓川地区に 1 カ所あります。

砂防ダムには、カメラが設置されており、役場の方でモニターカメラを雨の時には見ているんですけど、もし土石流が起きたら、たぶん 15 分か 20 分で下の方に流れてきます。そこで防災無線をちょっと危険な地区の方には個別の受信機と屋外スピーカーを設置して、いざという時に役場から一斉に流せるようにしています。

あと防災訓練なんかも地区の方々が自主的に実施されるようになりましたね。あと中学校の防災教育の授業をする機会もいただき講演に出かけました。また、300 年に 1 回の噴火ということで、記録を残す、のちのちの世代に伝えていく手立てが必要ということで「特集新燃岳大噴火を振り返る」というパンフレットを町民で作成しました。

それぞれの立場で経験した災害に対する思いを綴ってあります。

ＤＶＤのような記録映像も残すと防災訓練などで活用してもらえるので、今後作っていきたいと考えています。

話し手：瀬戸山幸一さん
聞き手：春山華穂
場　所：宮崎県高原町
取材日：平成 26 年 8 月

# ようこそ！「ぴ～すけハイスクール・カフェ」へ

【開会までの間に】

名札を書いたら、お好きな場所にお座りください。飲み物、お菓子は自由にお召し上がりください。引率の先生方、ご参加のみなさまもご一緒にどうぞ！

【本日のプログラム】

11:00　オープニング（挨拶、説明）
11:10　ゲストトーク「東日本大震災を被災して」遠藤洋希氏
12:00　ランチタイム
12:50　アイスブレーク　古川秀幸氏
13:20　ハイスクール・カフェⅠ「東日本大震災当時と現在、未来の私」
13:50　休憩
14:00　ハイスクール・カフェⅡ「高校生としてできること」
15:00　「聞き書きするには？」
15:25　クロージング（挨拶、今後の日程、アンケート記入）

【プロフィール】

講師：遠藤洋希（えんどうひろき）氏

1994 年生まれ。宮城県南三陸町出身。宮城県気仙沼高校を卒業し、現在は芝浦工業大学に在学。小学 5 年から高校 3 年まで軟式野球に没頭し、高 3 の夏には全国大会出場を果たす。大学では電力システムに関する研究に興味をもち学習に励んでいる。また、ベルギーでのホームステイ、フィリピンでの語学留学、国際学生寮での生活を通して、語学習得や異文化経験にも励んでいる。

ファシリテーター：古川秀幸（ふるかわひでゆき）氏

宮崎県立農業大学校准教授。宮崎市出身。鹿児島大学在学中「キャンプカウンセラー」として自然の家を転々とし教育に目覚める。卒業後、農業高校の教師として地域でのそば作りや食農交流、育てた野菜で作る「弁当の日」、県庁前朝市の活性化、被災地支援に取り組んできた。現在は、学生と共にプロジェクト学習や食農交流に汗を流し、食と農の未来を守る担い手を育てている。

【アンケート記入について】

アンケートへのご協力をお願いします。セッションが終了するごとに記入していただくと助かります。退場時に受け付けにご提出ください。

【写真撮影について】

本イベントは宮崎市学術研究振興財団の助成を受けております。報告書の関係で写真撮影をいたしますので、「写真に写るのはちょっと･･･」という方は受け付けまでお気軽にお申し出ください。

【ハイスクール・カフェとは】

2010 年文部科学省の呼びかけで始まった「リアル熟議」が元になっております。ワールド・カフェ形式で自由な話し合いのなかから、さまざまな政策提言や課題解決のヒントを得ようとするものです。

主催：宮崎公立大学ネットワーク研究室／NPO 法人みやざき教育支援協議会

# 第１回ぴ～すけハイスクール･カフェ

第１回「ぴ～すけハイスクール･カフェ」は７月 20 日（土）に宮崎公立大学で開催されました。ゼミ生 4 年の稲森美勇士さんの司会で、辻利則教授による主催者の挨拶、趣旨説明の後、第一部ゲストトーク「3.11 震災を経て」と題して、遠藤洋希氏に被災体験を話してもらいました。

「経験、教訓、これから」と 3 部に分けての講演は、静かな語り口の中に思慮深く、これからの生き方など多くの高校生たちに感動を与えるものでした。各自、聞いての感想などを付箋紙に書いてもらいました。（Ｐ36～38 参照）

今回は、高千穂高校や飯野高校など遠方からの参加があったことから､ランチタイムをはさんでの日程となりました。サンドイッチ、唐揚げ、レタス巻き、おにぎり等を自由に食べてもらい､和やかな雰囲気で午後の部に入りました。

ファシリテーターを古川秀幸氏にお願いし、第二部「ワールド･カフェ」リアル熟議に入りました。各テーブルは所属校毎に生徒が座っており､その中にゼミ生や一般参加者が入り､引率の先生方は個別にテーブルを作りました。

まず、ワールドカフェのルール（積極的に話す、話は短く簡潔に、相手の話に耳を傾ける、アイデアをつなぎあわせる、何でも模造紙に書く、飲み物コーナーＯＫなど）を説明します。模造紙に自由にいたずら書きしながら会話をするというスタイルです。各テーブルで１名をテーブルホストとして決めてもらい、それ以外の参加者は別のテーブルに移動（旅立ち）してもらいます。飲み物の補給やトイレは自分の判断で自由に動いてもらうことにしました。

第Ⅰラウンドは「テーマの探求」です。ファシリテーターより、「君たちは、１０年後の〇月〇日、宮崎で大災害が起こるという秘密を知ってしまった。世の中の混乱を避けるために、決してここにいるメンバー以外に話してはいけない。さて、君たちはどうなるのか、また何をすべきか？」という問いを投げかけました。

自然災害や地域の課題について、高校生は何ができるかを考えさせるという趣旨です。各テーブルで話し合いが始まります。出された意見が模造紙に書き込まれていきます。

第Ⅱラウンドは「アイデアの他家受粉」ですが、テーマを「自宅で災害が起きた時、持ち出したいもの」に設定されています。テーブルホストが出迎えてこれまでのアイデアを旅人に説明します。旅人も各テーブルのアイデアを紹介しながらつながりを探求し模造紙に書き込んでいきます。

第Ⅲラウンドもさらにアイデアの他家受粉が続きます。テーマは「１０年後どこにいて何をしているのか」です。ここでも今までの意見に加えてさまざまな想像が広がっていきます。

最後の第Ⅳラウンドでは「気付きや発見を統合」することになります。旅人は最初のテーブルに戻り、旅先で得たアイデアを持ち帰って話し合います。Ⅱ、Ⅲで出された意見を

参考に、テーブル毎に「アクションプラン」を考えます。具体的な災害場所や避難場所を想定して考えさせ、地域に目を向けることが主眼です。

最後の全体セッションでは、各テーブルで出されたアイデアを共有します。テーブルごとに「アクションプラン」を発表しました。そして今日の振り返りとして１分間黙想し付箋紙に記入。黄色に「心に残った言葉」。緑に「これから取り組みたいこと」を書き、リアルツリーとして模造紙に貼付していきました。

その後、NHK 放送番組「地域に生かせ！高校生のチカラ」（昨年度活動）視聴し、「聞き書き取材について」の説明があり、当日のイベントが終了しました。

# 3.11 震災を経て

~LIFE CHANGING EXPERIENCE~

## 遠藤　洋希

- １９９４年生まれ
- 宮城県南三陸町出身
- 宮城県気仙沼高校卒業
- 芝浦工業大学工学部在学

## 話の流れ

- １．経験　～Experience～
  （質疑応答）
- ２．教訓　～Lesson～
  （質疑応答）
- ３．これから　～Vision～

## 「３．１１」
## 人生のすべてを変えた

~LIFE CHANGING EXPERIENCE~

何もかも失った
新たな出発点

# １．経験
# ～EXPERIENCE～

２０１１年３月１１日
午後２時４６分

別の世界に
飛ばされた．．．？

野球ノート（日記）

生活の様子は．．．

２．教訓
～LESSON～

## 2．1　「当たり前」の当たり前じゃなさ

インフラ・食糧

望んだものがすぐ手に入る

## ~EPISODE~

「衝撃のなっちゃん」

## 3．2
## 今この瞬間も．．．

今こうしている間にも、世界のどこかに“当たり前”を心から望んでいる人々が．．．

## 3．これから
## ～VISION～

## 一番大切なもの
～PRIORITY～

## 幸せ
～HAPPINESS～

幸せって？

・笑顔

・自分の夢を追う自由

*"ALWAYS LOOK ON THE BRIGHTER SIDE OF LIFE"*

「どんな時でも前向きに」

## 遠藤洋希氏講演の感想

- 震災当時のお話「まったく情報が入らず、家族の安否もわからない寂しさ、不安。水や食料を探して分け合った過ごした苦労。一番大切なもの＝人とのつながり」など、想像しながらお話を伺いましたが、一日一日、懸命に生きていたのだなと改めて辛さを知ることができました。

- いかなる災害が起こっても、それを新しい自分になるきっかけとする心構えが平生から養われなければいけない。災害は人間を物質的な束縛から解放し、考える葦としての人間にふさわしい精神的な問いに向けさせると思った。

- リアルな話が聞けて良かった。今でも、テレビなどで被災地の状況を知りたいと思った。

- 遠藤さんの話を聞いて、東日本大震災の時のことを改めて実感しました。被災した状況とか心境はわからなかったので聞けて良かったと思います。テレビを見ているだけでは知りえない被災地の現状が・・・。自分がパニックにならないようにしっかりと確認して行動したいと思います。

- 今日は遠藤さんの話を聞いてすごく心に残ったし、衝撃を受けました。まず、私たちは被災地の様子はテレビでしか知ることはできません。しかし、実際話を聞くと、水が足りなかったり、親戚の家に身を寄せたりしていることがわかりました。この日のことを忘れないようにしたいと思いますし、話をいろんな

人に教えたいと思います。あと、私も夢を追い続けたいと思います。

- いつでもどんな時でも前向きに’’と、言葉では簡単に言えますが、その言葉を支えに自分を奮い立たせながら、前を向いて進んでいる。遠藤さんの姿に、自分の人生を反省しました。そして、遠藤さんが進もうとされている道が人の幸せに貢献する道であることに心が揺れました。

- 私は今回遠藤さんの話を聞いて、たくさんの人の幸せとは何なのか考えることができました。震災の話というものはテレビなどで耳にする機会が多く、東北の人は大変だったんだなと思ってました。しかし、今回の話を聞いて、テレビで聞くよりも、ライフラインなど私が思っていた以上に大変だったことがわかり、ぴ～すけハイスクールに参加してよかったと思いました。これからは今回の話を生かしていけるようにしていきたいです。

- 直接生の声を聞くことができ、学ぶことが多かった。
- 災害に遭うと、考えが変わることがわかった。当たり前であることの幸せ。
- いつもの生活は当たり前でなくとても大切なこと。「当たり前」の当たり前じゃなさという言葉に感動した。

- テレビなどの報道と生の声は違った。地震の不安などリアル。当時は、理科の実験中。先生が震度６の地震がなかなかないと話してた時。

- 自分たちが今どれだけ恵まれているか、改めて感じた。

- 知ってそうで知らない事実。想像以上。実感が湧かない。少しでも理解したい。

- あまり今、震災のことを耳にしない。元通りになるのは難しいということがわかった。

- 震災の恐ろしさと幸せについて考えさせられた。当たり前がどんなに幸せなことか。

- 自衛隊が来るまでに１０日もかかるのはそれまで大変だと思った。水、身近だけど大切。野球ノートで不安がつのっていくのがわかる。「当たり前」じゃない当たり前じゃなさが印象に残った。

- もし、自分がその立場だったらと考え、言葉で表せないほどの恐怖を感じた。自分は「幸せ」だと改めて気づいた。「どんな時も前向きに」とても心に残った。

- 当時、いつも通りの生活をしていた。震災の教訓はとても心に響いた。“「当たり前」の当たり前じゃなさ”“今この瞬間も・・・”が印象的。今まで当たり前に思っていたことが、実は当たり前でなく幸せなこと。ニュースを見て、復興は進んでいると思っていたが、復興は全然進んでいないことを知った。知っていると思っていたが知らないことが多い。たくさんのことを学んだ。“Always look on the brighter side of life”の言葉を大切にしたい。

アンケートの記述より

**『講演「東日本大震災を被災して」の話を聞いてどのようなことに気づきましたか？』**

**被災をした人でなければわからない**

「実際に体験した人にしかわからないことが聞けたのでよかった」「被災しなければわからない、食べ物や水のことなどを知れた。そこからやはり、日ごろの備えと人と人とのつながりの大切さに気付いた」「自分たちの目線と被災者の目線での考え方の違い」「被災者の生の声を聴くことができて本当に貴重な話だと実感しました。”うまく説明できないけれど、、、”という言葉に体験した人にしか分からない部分の多さを感じました」「実際に被災した方の話でないとやはり分からないことが多い。メディアだけでは伝わらない。」「知っていると思ったけど、意外と知らなかったり、、、新しいことを学べた」「あたりまえのことがあたりまえにできることが幸せっていうのはすごく心に残りました。夢を追い続けることも忘れないようにしたいです。」「自分たちの身の回りにもありえない事がありえてしまうと実感しました」「実感がわかなかった頃とは、違うという話がとても親身になったお話でした」「話を聞いて一番心に残った言葉は『あたりまえなことはあたりまえじゃない』という言葉です。」「私たちが生活に必要である衣・食・住はあたりまえにあるものだと思っていたけれど、そうではないんだと改めて実感することができました」「実感があまり持てない」

**被災の際に大切なこと**

「地域の人々の協力の大切さ」「自衛隊から物が届くのが遅いと知った。周りの人との協力がとても大切だと思った」「水や食料が一番なくてはならないものなこと」「支援物資がうまくいきわたっていなかったと聞き、残念でした。（水も満足になかった）速やかに必要な物や人が届くシステムが不可欠。情報が全く入ってこない事の不安さ。家族がバラバラになった後、どう連絡を取るか考えておきたい」「自分の生活を見直したいと思います」「遠藤さんの生き方の素晴らしさ。自分自身の人生を反省。」「突然被災した“日常生活”が今日の初めて逢った遠藤さんの今日に続いていること。地震・津波はある日突然日常生活にふりかかる」

**『ワールド・カフェ「高校生としてできること」について、 どのようなことに気づきましたか？』**

**ワールド・カフェでいろいろな意見が聞けた**

「ワールド・カフェという話し合いの仕方は初めてだった。すごく効率よく話し合えてよかった」「ワールドカフェは違う世代の人が集まるのでたくさんの意見が出た」「ワー

ルドカフェはいろんな意見が聞けてすごくためになった」「人の意見を聞くことで新しい自分に考えができてよかった」「いろんな人と話ができて、いろいろ勉強になりました」「いろいろな年齢、立場の人達とこんなにうまくお話ができるとは思っていなかったので、ここに集まっている方々は本当にいい方々ばかりなんだなーと思いました」「私はロベタで話すことが苦手だけど、楽しく話をすることができたのでよかったです。また、自分たちの意見以外でもいいものがあり勉強になりました」「大人の方々と高校生では思考が違っていて、もっと地域の交流が必要だと思った」「地域の高齢者と話すことは新鮮な体験」「人と意見を交換することは大切だなと思いました」「高校生はしっかりとした考えを持っている」「高校生の斬新な意見に対して価値観がとても変わりました」「高校生がしっかり考えていてくれた。地域への思い」「高校生の”力”のすばらしさを再確認しました」「高校生がしっかりした考えを持っていることに感激し、頼もしく思った」「高校生と大人が食べ物を食べながらすると、とてもリラックスできて発言ができました。とても参考になりました」

**この会で考えたこと**

「自分ももっとたくさんの考えをもっておかないとなと思いました」「地名には、その土地の特徴が含まれている→災害の予測につながる。言い伝え（自然観察）も災害予知の手助けになるのも面白かった」「災害の経験が年齢に関係なく身近な出来事であったこと。」「天災だけでなく人災も考えるべきだと思った」「一家庭に一つ緊急放送を設置することで放送が聞きやすくなる」

**『本日のハイスクール・カフェで伝えきれなかったことや、今後やってみたいことをお書きください。』**

**地域とのかかわりを増やしたい**

「今後は地域についていろいろ考えていきたい」「地域との関わりを増やしたい」「地域の人ともっと交流してみたいと思った」「地域交流の機会がふえるといいなーと思いました」

**今後やってみたいこと**

「人災の対応や、自然との対立、共存など自分の意見を伝えられなかった」「自分の思想を深めたい」「南海トラフ大地震についての準備をしたい」「土砂災害時の備えなど」「生徒自身が身近な人に伝えていく。生徒が主体となる」「大学生でやってもいいのではないかと思いました。宮崎大学インターゼミナールでも似たような形でしてみたいと思います」「民話、伝説をお年寄りに聞いてみたいと思いました。(昔の街の様子)」「全員初参加でしたが、大変充実した時間でした。ありがとうございました」「ワールドカフェは数回経験しています。また参加したいです」

# ようこそ！「ぴ～すけハイスクール・カフェ」へ

【開会までの間に】
名札を書いたら、お好きな場所にお座りください。飲み物、お菓子は自由にお召し上がりください。引率の先生方、ご参加のみなさまもご一緒にどうぞ！

【本日のプログラム】
11:00　オープニング（挨拶、本日の流れ）
11:10　アイスブレーク　　石川　世太　氏
「ぴ～すけ」とは　辻　利則　教授
聞き書きレポート報告（各校５分程度）
12:35　ランチタイム
　　遠藤洋希氏（前回講演者）テレビ挨拶
13:15　防災アンケート結果報告　稲森美勇士氏（公立大ゼミ生）
13:25　ハイスクール・カフェ「みんなで考える、地域と防災」
15:25　クロージング（挨拶、アンケート記入）

【プロフィール】
ファシリテーター：石川　世太（いしかわ　せいた）氏
東京のはしっこ生まれ、2011 年 4 月に鹿児島へ移住。東京農工大学農学部を経て環境・地域活性の分野でのサラリーマンの後、現在はファシリテーター・株式会社マチトビラ取締役（長期実践型インターンシップの運営）の二足のわらじ中。若者の成長・モチベート・チームワークづくりのノウハウは 10 年物。これまで延べ約 26,980 人、1,509 時間のワークショップ・講義を担当。「自分のことも、相手のことも大事にするあり方」がよりよい人間関係・社会をつくると感じている。

【アンケート記入について】
アンケートへのご協力をお願いします。アンケートは 2 種類あります。防災関連とイベント関連です。書けるところは早めに記入していただいて結構です。いずれも退場時に受け付けにご提出ください。

【写真撮影について】
本イベントは宮崎市学術研究振興財団の助成を受けております。報告書の関係で写真撮影をいたしますので「写真に写るのはちょっと･･･」という方は、受け付けまでお気軽にお申し出ください。

【ハイスクール・カフェとは】
2010 年文部科学省の呼びかけで始まった「リアル熟議」が元になっております。ワールド・カフェ形式で自由な話し合いのなかから、さまざまな政策提言や課題解決のヒントを得ようとするものです。

主催：宮崎公立大学ネットワーク研究室／NPO 法人みやざき教育支援協議会

# 第２回ぴ～すけハイスクール･カフェ

第２回「ぴ～すけハイスクール･カフェ」は12 月 20 日（土）に宮崎公立大学多目的室で行われました。各校からの聞き書き報告を主に、ワールド･カフェを取り入れながら、高校生がいかに地域に関わるか、その課題などを話合いました。

今回のファシリテーターは鹿児島市の石川世太氏です。スタッフ３名の方も一緒に来ていただきました。9 時半よりゼミ生も集まってもらい、「最近、得したこと」を話題に入れて、お互いの自己紹介をしました。名札は読んで欲しい名前やニックネームを書くことになっています。すでに雰囲気づくりが始まっています。

会場設営は部屋の雰囲気を和やかにするため、通常の講義形式（黒板が前）ではなく、外の風景を取り入れ、南面の窓を正面にテーブルを配置しました。準備段階から BGM が流れています。模造紙や付箋紙、ペンなどを各テーブルに置いていきます。

石川さんは「今日のねらい」などを用紙に書き込んでいました。「防災を通して、地域のことを、考えるきっかけにする」「普段はあまりしない話し合いのやり方を通して“いい話し合い”を体感する」「他校の人との関わりをおおいに楽しみ視野を広げる“多様性”」などなど。

10 時半より高校生が徐々に集まり始めました。11 時よりオープニングです。司会進行はゼミ生３年の川西理佳さん。自己紹介の後、辻教授の主催者挨拶、趣旨説明があり、早速、ファシリテーター石川さんの出番です。自己紹介の後、アイスブレイクとして手（指）の運動から入りました。笑いが出るなかで、全体が打ち解けていきます。

今日の集まりでは「質問はいつでもどうぞ。出入り自由（離席自由）。できるだけたくさんのお土産を。反応はいつもの２倍で。他人の発言を否定しない。会議の仕方が変われば社会が変わる」ということなどを確認し合いました。説明しながら、それらを書いた用紙がホワイトボードに貼りつけられていきます。

午前の部は「ぴ～すけ」の概要説明です。震災時のビデオを見せながら、ぴ～すけカードの仕組みが紹介されました。その後、各校からの取材レポート報告です。感じたこと、思ったことを、各自、付箋紙に書いてもらいました。

前回同様、ランチタイムは近くのコンビニから、サンドイッチ、唐揚げ、レタス巻き、おにぎり等を準備しました。バイキング方式で参加者に好きなものを取ってもらいましたが、ほとんど消化してくれて取り合わせも好評だったようです。その間、第１回で講演してもらった遠藤洋希さんに、気仙沼市よりテレビ挨拶をしてもらいました。

午後の部は、ゼミ生４年の稲森美勇士さんから防災アンケート結果を説明してもらい、「ワールド・カフェ」形式のリアル熟議に入りました。まずグループ分けをどうするかですが、石川さんが参加者全員に住んでいる地域毎に部屋の四隅に分かれてもらうように呼び掛けました。全員を動かします。

それから輪になるように集まってもらい、一人ずつ端から「み、や、ざ、き、も、さ、む、い、わ、ね」を言わせます。そして同じ語の人たちが同じテーブルにつくというやり方でグループ分けが行われました。

熟議に入る前に「フィンランドの小学生が作った議論の仕方 10 箇条」が紹介されました。さらに、単語を２０個ほど出して、そのことばのイメージを絵に描くという作業もやりました。石川さんが強調されたのは、「この場は社会の縮図であるということ。どのように関わるか、どのように表現するか、これからの生き方の訓練になる」ということでした。

熟議では取材レポートやアンケート結果をふまえて、災害発生時の自らの行動や日頃の地域への関わり方などを考えてもらいます。

第 1 タームは「10 年後の宮崎を考える」というテーマです。各テーブルで活発な議論が始まりました。第 2 タームは「身近な人や地域のことを考える」、第 3 タームは「具体的に何をやるか」というテーマで続いていきました。

それぞれのターム毎に感想を述べ合い全体に共有します。その際、発言の強要（指名）はされません。石川さんは「気づきや発見を伝えるのは今しかないよ。この機会を逃したら、一生、言わないで終ってしまうよ」といって自発的に生徒たちが発言するのを待ちます。しばらく待つと満を持して幾人かが意見や感想を述べ合っていきます。純粋、柔軟な感性の高校生だけに、どれも共感を得るものばかりでした。

それらの思いを付箋紙に書き、ツリーに貼っていきます。最後に全員で記念撮影し、アンケートを記入してもらって終了しました。

次のようなテーマについて、模造紙に意見を書いてもらいました。それぞれ以下のような意見が出ました。

**１０年後私たちはどんな宮崎で（地域で）どんな暮らしをしていたいだろうか？**

「県木がフェニックス（意味：不死鳥）→長生きできるパワースポット」「地下鉄や新幹線を走らせたい」「人がもっと増えて若い人の働く場、出会いの場を増やす」「子育てしたくなるような環境づくり」「陸の孤島脱却！働く場を増やしたい・テレビのチャンネルを増やす」「会う人会う人顔見知り（地域のつながり・挨拶ができる）」「新しいことをする人を認めよう（NOT 出る杭は打たれる・出過ぎる杭は打たれない）」

**１０年後私たちはどんな宮崎で（地域で）どんな暮らしをしていたいだろうか？（part２）**

「地域で暮らす力 UP！宮崎を中心に第３次ベビーブームを！」「お年寄りが住みやすい地域づくり→お年寄りが自立した町に→低価格で介護施設を→自宅で介護できるヘルパーさん（地域医療）」「人のあたたかい宮崎であってほしい（コミュニケーションゆたかに）」

**そんな１０年後を想いながらこれから私たちは何をしていきたいだろうか？私個人は？周りの人たちとのかかわり方は？地域とどうかかわる？**

「自分のやりたい仕事を地元でできるようになりたい。」「人口が少ないことの意味→人とのかかわり方が密接→増やしたい増やしたいだけじゃだめかも・・・？」「宮崎いいなって思った（今まではチャンネル少ないとかいやとか思ってたけど）」「いろんな考え方を持っている人がいる！こういう場をこれからも増やしていきたい。」「今までやってきたディ

ベートと違っていろんな人の考えを知りたい思いから始まる。人の話を聞く姿勢のほうがいいものが生まれると思った」

グループごとに、付箋にいろいろな意見を書いてもらったところ、次のような意見がでました。

**地域とのつながりを作る**

「地域とのかかわりを深めよう」「地域の人たちとのかかわりを大切にする」「もっと周りの人に自分からかかわっていく」「地域の人たちとの絆を深めよう」「ご近所付き合いの強化」「最近遠くなっていた隣人との関係をよくする」「明日から地域の高齢者に話しかけるようにしよう」「地域での奉仕活動に参加する」

**挨拶をする**

「自分から積極的に挨拶する」「もっと挨拶しよう」「あいさつをきちんとする」「地域の人、近所の人へあいさつしよう」「すれ違った人に必ず聞こえる声であいさつ」

**地域の人や他の世代とのコミュニケーションを築く**

「会話などのコミュニケーションを積極的に！」「マンションの人（近所）とのコミュニケーションを大切にしたい」「もっと地域の人たちと話してかかわりを持つ」「近所の人たちに学校生活について話してみる」「気づきのきっかけをおすそ分けできる大人になろう」「いろんな世代、いろんな仕事の人など、たくさんの人と楽しく本気で話す」「いろんな世代の人たちと話をする機会を増やそう」「年下の人たち『下の世代の人たち』のことを考えてみたい」「もっと積極的に思ったことを言おう」「積極的に行動する」「人の思いや考えを大切にしていこう」「人の話を聞く」

**地域への関心をもつ**

「地域を知る」「地域の行事に興味を持つ&参加」「『宮崎のこと』を調べよう」「宮崎の良さをもっといろんな人に発信しよう」「夢を実現できることをしよう！」「勉強しよう！」

**心構え**

「話し合う時の自分の姿勢」「初心に帰ろう」「きれいな心でいよう」「物事をポジティブに考える」「運動しよう」「人を大切にする」「時間を守る」「ドイツ語を勉強」

地域参加の課題として次のような意見が出されました。

**地域活動の情報について**

「地域の活動の情報をあまり知らない」「いつ、どこで、どんな活動があるのかがわからない」「どのような地域活動があるのか知らない」「情報が必要だと思った」「情報がない。」「情報が少ない」「何がおこなわれているのか、あまり知らないから」「どのような地域活動があるのか知らない。忙しい」「自分の住んでいる地域でどのような活動があるのかを知らない」「具体的に何をするかわからないから」「開催している日時、場所をしらない」「活動の事をあまり知らない」

**地域活動への参加について**

「地域活動に参加したことのある人が意外と少なく驚いた」「地域の行事に参加したいと考えていても、あまり参加できていない人などのためにも、もっと地域のつながりを強め、行事をよく知ってもらうことが大切だと思いました」「地域との関わりが少なく、自分が地域の一員であるという実感

が薄いから」「地域活動への参加は大事だと思った」「地域のひととのつながり大事、ボランティアに参加」「『お寺』が地域にとっても大事」

**参加できない理由**

「時間がない」「部活と友人の時間にとられる」「日程が合わない」「部活が忙しいから」「部活や勉強で忙しい」「Homework におされ、時間がないから」「時間的な余裕がない」「交通手段がない」「一人じゃ行きにくい」「一人じゃ参加できない。群れたがらない。」「他人事だから」「時間が古いから面倒くさい」「よだきい」

**災害への対応について**

「避難した先での食糧確保、土砂崩れで住宅、観光名所が被害」「地区によってなぜこんなに被害が異なるのか」「園児や外国人などことばや行動のカベがある人への対応の仕方を考えたい」「学校で、地域で、災害が起こったらどうする？というルールづくりが大切だと思う」「冷静な対応」「ボランティアで高校生も協力、地域の人とのつながり、外国人目線」「その地域の写真などを見ながら説明されると良いと思う」「自治副会長がお年寄りをおぶって避難させた」

アンケートの記述より

『「ぴーすけの概要説明」の話を聞いてどのようなことに気づきましたか？』

**震災と防災について**

「地震の揺れの強さってすごいと思った」「本当の地震の怖さ。」「地震の映像をこんなに見たのは初めてで、しっかり想定をして、今からでも考えておく必要があるんだと思った」「震災は他人ごとではなく、防災について考えければならないと思った」「防災について深く考えることがなかったのでこんなものもあるのかと知ることができてよかった」

**ぴーすけカードについて**

「ぴ～すけカードがどのようなことか理解することができた」「ぴ～すけのことが詳しくできたのでよかった」「ぴ～すけカードがまずは宮崎県に広がるといいなと思った」「落下物に気を付けないとかなり危険だと映像から分かった。障碍者、高齢者、子供たちを守るためにぴ～すけカードを普及したいと思った」「ぴ～すけは毎日持ち歩くことが大事だと分かった」「災害時に子供や高齢者が逃げ遅れることないように対策をすることは聞いたことがあるが、ハンディを持った人の対策は知らなかったのでとてもすごいと思った。このカードのことをもっとたくさんの人が知ってくれるといいなと思う」

**地域のつながりについて**

「地域のつながりが大切。」「地域の結びつきが弱くなっているのは宮崎市内だけではないのだと思った」「地域ごとでの対策が異なるので様々な対策が分かる」

**意見交換について**

「高校生の思いに触れることができてよかった」「意見交換ができてよかった」「みんなが心をＯＰＥＮにすればもっともっと話し合いが活性化したのでは？」「防災についての知識が増えた」「多くの人に知ってほしいと思いました」

**『「各校のレポート報告」を聞いてどのようなことに気づきましたか？』**

**各校のレポート報告について感じたこと**

「各校で調べた内容がバラバラで面白かった」「どの高校も進んでいてびっくりした」「他の学校の違った視点に気づけた」「自分たちの思ったことより違っていてよかった」「それぞれよかった」「各校よく調べているなと思った」「若者も地域や社会のことをよく考えてるなと思った」「写真などの映像があるとよかった」

**視点の違いについて**

「また課題を見つけて解決しようとしているところがすごい」「視点がそれぞれ違って考え方もたくさんあるんだと思った」「いろいろな視点があると分かった」「いろんな視点からの報告があってよかった」「それぞれが調べた被害の影響をよく知れた」「考えさせられることが多くありました」「外国人は日本で被災した時にどうするのだろうと考えたことがあるのでＡＬＴの先生の話はとても印象に残った。災害が起こった時、どこに避難するのかきちんと決めておくことはとても大切だし、いつ起こるかわからない災害に備えておくことは重要だと改めて感じた」「外国人への取材は視点が違って面白かった」

**気づいたこと**

「今日参加していた人たちも何らかの災害を経験していたこと。」「どこでどんなことが起こっていたのかわかった」「様々な災害を知ることができた」「どの話もとても重みがありよかった」「人だけでなく家畜なども避難の対象であることが分かった」「地域と

のつながりは大事だなと気づいた」

**『ワールド・カフェ「みんなで考える、地域と防災」について、 どのようなことに気づきましたか？』**

**宮崎を変えるには**

「私達は宮崎にはＯＯがないから都会に行こうと考えがちだけどそのままでは宮崎は何も変わらないので１人１人がもっとこうするべきだという考えを持ち、それを声にして伝えていくことで、また、今日のようにたくさんの人と意見を交換することで少しずつ宮崎がもっと住みやすい街になっていくと思った」「宮崎に必要なもの（交通・税金など)」「宮崎の良さ。」「いろいろな考えの人がいるんだなと思った。宮崎でできることを考えたいと思った」「他校の人の話を聞いて田舎にもいいところがあるんだと発見することができた」「人口が少ないという負のイメージから明るいイメージに変えることができたのでよかった」

**いろいろな人の意見を聞けてよかった**

「人それぞれで考えていることが異なるので知れてよかった」「自分が考えもしないようなことがあったのでとてもよかった」「真面目に社会のことを考えてくれる高校生がいることに安心しました」「違う年齢の方の意見も聞けてとてもよかった」「いろんな考えがある」「みんないろいろな意見を持っていて驚いた」「１人１人の感性が違っており、勉強になった」「人が多くなるほど新たな発見があるのだと思った」「みんなの考えていることがさまざまでよかったし楽しかったです」「みんなの防災についての考えがよくわかった」

**交流が大切**

「人との関わりは大切！」「地域との交流が大切ということに気づきました」「このような活動にはたくさん参加したいし、中高大学生をたくさん参加してほしいと思いました」「備えが必要である」

**『本日のハイスクール・カフェで伝えきれなかったことや、今後、やってみたいことをお書きください。』**

**地域に関わりたい**

「地域について」「地域の人ともっと関わりたい。」「地域行事へ積極的に参加。」「地域のそれぞれのことをまとめたい。」「地域の人たちとボランティアがしたいです」「人との関わりを増やしたい。」「地域の人たちに挨拶をしようと思いました」

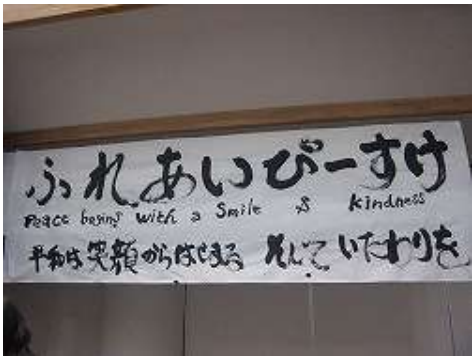
**今後やってみたいこと**

「積極的に行動すること」「最後付箋に書いたことを実行するようにしたいです」「災害についてもっと詳しく知りたい」「もっと多くの高校生と話してみたい」

# ふれあいぴ～すけ

2 月 15 日（日）辻利則教授のネットワークゼミの合同報告会が「ふれあいぴ～すけ」と題して行われました。

ゼミ生は、福祉班「サロン de ぴーすけ」（宮崎中央西地区社会福祉協議会共催）、教育班「ぴーすけハイスクール」（NPO 法人みやざき教育支援協議会共催）、ボランティア班「ふれあいアート」（NPO 法人宮崎県ボランティア協会共催）に分かれて研究を行っていますが、その共通テーマは「災害時における地域弱者（要援護者）支援」です。




どの研究でも課題として上がったのは、災害時だけでなく、平常時より、知らない者同士がつながる必要性（共助）でした。

そこで、今回の企画は「ふれあいぴ～すけ」と題して、それぞれの事業に参加していただいた高齢者、高校生、障がい者などを一同に会して、知らない人同士がつながる喜び、豊かさを体感しようということになったわけです。

「結びつく」「知る」「関わる」ことをキーワードに、初めての人同士が、食べて、観て、話して、聞いて、自分が気持ちよく、人に近づいて面白いなー、とそんな思いを共有できる機会として企画されました。

11 時から受付の終わった人は､焼かない粘土で土偶（土神様）づくりを体験してもらいました。これは「ふれあいアート」で行われた取り組みです。

11 時 30 分から「サロン de ぴーすけ」で行われた健康体操を歌や音楽に合わせて全員でやりました。指導者の方から「1 日のなかで 1 冊の読書、10 個の感動、100 回の深呼吸、1000 字の文章（日記、手紙）、1 万歩の運動を目標に健康を維持していきましょう」という紹介がありました。

12 時から食事会です。中央西地区のボランティアの方の手作りで、ばら寿司と豚汁が用意されました。料理のおいしさだけでなく、食事をともにする楽しさ、和やかさを味わいました。

13 時から、ゼミ生 3 年生による活動報告です。プレゼンテーションを使って、3 班の活動をそれぞれ報告してもらいました。ゼミ生相互も、またそれぞれの参加者にも活動を知ってもらう良い機会となりました。

13 時 30 から、脳性麻痺のある和田祥吾さんと野海靖治さんのパフォーマンスです。和田さんは「おおきなカブ」を演技しながら読んでいきます。参加者にも「うんとこしょ、どっこいしょ」と一緒にかけ声をかけてもらいます。和田さんは初めてということでしたが迫真の演技でした。続けて、野海さんは大筆を持っての墨書です。生駒新一郎さんに支えられながら、「知る」という文字をエネルギッシュに揮毫してもらいました。参加者も二人のパフォーマンスに圧倒されていました。

14 時から色カルタです。高橋宏典さんにファシリテーターをしてもらい、10 のテーブルに分かれて知らない者同士が親しくなる方法を体験していきます。色カルタはみなさん初めての体験でしたが、例えば「初恋の色は何色？」などという問いかけに、参加者はテーブルに置かれた色カルタを選んでいきます。そしてその色を選んだ理由を各人が紹介していきます。

記憶を色にたとえて各人の体験などが話されていきます。特に年配者の体験談や人生談に若い人たちは聞き入っていました。

最後に、全員に本日の印象を色カルタで選んでもらいました。みなさん明るい色が多く、その満足度の高さが表れていました。

# 実施要項

**【事業名】**高校生による聞き書き地域防災「ぴ～すけハイスクール」
（宮崎市学術研究振興助成金地域貢献研究事業）

**【現状の課題】**（地域防災意識の欠如、自治公民館加入率の低下）

地域での人のつながりが弱まっており、とくに若者の地域離れは顕著である。そのため災害時における自発的組織的な助け合いが築きにくい。また、高齢者や障がい者などの社会的弱者への対策が遅れている。

**【事業の目的】**（聞き書きによる地域への関心、ICT 活用）

高校生が地域の古老や自治公民館長、民生委員、消防団長などに過去の災害や防災の実態を取材し、携帯電話やスマートフォンなどの ICT がどのように活かせるのか、その可能性を探る。県内全域から聞き書きした記録を集約し、熟議や成果発表、製本化を通して、高校生のコミュニケーション力や課題解決力、地域への関心を高めることを目的にする。

**【応募要領】**

参加資格：高等学校に在籍する生徒（先生および保護者の承諾を得ること）
募集定員：県内全域で 20 チーム（1 チーム４～５名）
応募方法：別紙申込書を FAX または電子メールで受付（郵送可）
募集締切：６月１３日（金）
費　　用：参加校には取材費を支給
個人情報：取得した個人情報は当事業にのみ使用すること。（Web サイトを含む）
マスコミ取材（新聞、テレビなど）があることを許諾すること。

**【スケジュール】**

5 月　　：県内各高等学校に参加要請
6 月　　：地域防災に関するアンケート調査
7 月 26 日：第 1 回熟議「ハイスクール・カフェ」宮崎公立大学
8～11 月：聞き書き

- 計画づくり（取材先、質問内容、取材機材、役割分担）
- 地域を数回訪問（被災の状況、避難の実態、防災の取り組みなど）
- レポートの作成（テーマ、構成、写真など）、提出（添削を含む）

高校生からの聞き書きをWebサイトで情報発信（ゼミ生）

12月20日：第2回熟議「ハイスクール・カフェ」宮崎公立大学

2月15日：成果の発表・フォーラム　宮崎公立大学（小・中学生、高校生、大学生、一般参加）

3月　　：冊子『語り継ぐ災害体験－高校生による聞き書き地域防災』作成

**【事業効果分析】**

1. 事業の社会貢献性（公益性）

聞き書き取材を通して自然災害や地域、ボランティアについて関心を高め、高齢者や障がい者支援を含め、個人が地域で生活する意味を考えさせる。

2. 事業のニーズ（優先度）

高校生が地元の古老や自治公民館長、民生委員、消防団長などと語る機会が少なく、聞き書き取材を通して交流を深め、地域防災や生命の尊さについて学ぶ。

3. 事業の先駆性

① 高校生による全県的な聞き書き取材は初めての試みである。

② 聞き書きにより、古老や地域住民との間に対話が生まれる。

③ 高齢者、障がい者へのICT活用で、効率的な安全安心の確認ができる。

④ 高校生と大学ゼミ生との交流を通して高大連携がはかれる。

4. 市民・地域への波及効果

① 冊子作成で県民へ「宮崎の災害文化」をアピールできる。

② 聞き書き取材を通して自治公民館活動への関心を高めることができる。

③ 災害時におけるICT活用の理解を広めることができる。

5. 翌年度以降の計画及び発展性

地域防災に関して、全県下から高校生による聞き書き取材を募る。継続して行うことで次世代を担う若者に地域防災とコミュニティ形成の意識を醸成する。また、地域住民とともに青少年の課題解決能力を培う。

# 聞き書きの流れ

**８月　聞き書きのための計画づくり**

- □ 訪問する日時や地区を決める
- □ 交通手段、質問する内容、機材などを準備する
- □ 訪問する地区の知り合いなどに連絡し、聞き書きできそうな人を紹介してもらう
- □ 紹介してもらった人に連絡し、訪問する日時を決める

**８月～１１月　「聞き書き」取材（回数は任意）**

- □ 聞き書きする人を訪ね、インタビュー（録音）する
- □ あるいは、直接、現場に行って、見かけたお年寄りなどにインタビューする
- □ 聞き書き風景などを写真（数枚）に撮る
- □ 取材した録音テープを書き起こしする
- □ 取材日、取材者ごとに、簡単なレポート（A4１枚、写真付き）を提出する
- □ 内容を点検後、ぴ～すけハイスクールのＷｅｂサイトに載せる（ゼミ生）

**１２月～１月初旬　　報告書作成**

- □ 提出したレポートをもとに報告書をまとめる（添削をいたします）

ex：何を中心にまとめるか、構成はどのようにするか、どんな写真を使うか

**１２月２７日（土）「第２回ハイスクール・カフェ」**（場合によっては Web 中継もあり）

- □ 提出された報告書を発表してもらい、地域の課題や防災について話し合う

**２月１５日（日）　成果の公表・フォーラム　会場／宮崎公立大学**

- □ ぴ～すけに関わるさまざまな人が集うフォーラムのなかで報告書を 1 本発表してもらう
- □ 提出された報告書を『語り継ぐ災害体験』として製本化する

参考資料：2013 年版『語り継ぐ災害体験』（平成 26 年 3 月刊）
『宮崎県における災害文化の伝承』宮崎県土木部編（平成 18 年 3 月刊）
宮崎県ホームページからダウンロード可
『みやざきの自然災害』～地震・津波・火山・気象災害を知って備える～
みやざき公共・協働研究会編

# 「ぴ～すけ」について

## ヘルプカード

「ぴ～すけ」は手助けが必要な人と手助けができる人を結ぶ弱者救済支援システム、通称ヘルプカードです。障がいのある人はもとより高齢者、幼児そしてすべての人が災害や事故などの緊急事態に巻き込まれたときに、周囲の人に「あなたの手助けが必要です。私を助けてください」と、あらかじめ登録しておいた必要情報を、携帯電話やスマートフォンでＱＲコードを読み取り、迅速な避難へと導くための弱者救済支援システムです。

## 活用場面

☆災害のとき
・地震、津波、台風、洪水など災害や事故が発生したとき
・災害に伴う避難が必要となったとき
☆緊急のとき
・道に迷ってしまったとき
・パニックや発作、病気などのとき
・交通事故などにあったとき
☆日常的に
・ちょっとした手助けが欲しいとき
・一人暮らしの高齢者など見守りが必要なとき

### 名前の由来は？

マザーテレサの有名な言葉である、Peace begins with a Smile（平和はひとつの微笑みから始まる）という言葉に由来し、独自に and Kindness を新たに付け加えた頭文字 PSK から「ぴ～すけ」と命名しました。

### なぜ、子豚なの？

子豚は私たち人間に似て社会性の強い動物であり、とても友好的で仲間意識が強く、仲間が困っていれば自分の危険をかえりみずに助けようとしたり、問題が起きれば共に悲しむ等感情に満ちた生き物なのです。とてもきれい好きで清潔な生き物ということから、ぴ～すけのキャラクターにしました。

（「ぴ～すけ」は、障がい福祉施設 T.H.S.RaCoo！と宮崎公立大学の共同で制作されました。）

# 参加者・協力者一覧

| | |
|---|---|
| 高千穂高校 | 岩本　雄太 |
| | 甲斐　翔太 |
| | 佐藤　柊士 |
| | 穴山　百華 |
| | 中嶋　未夢 |
| | 和田　郁香（教諭） |
| 本庄高校 | 海老原　太一 |
| | 三角　希夢 |
| | 長谷川　雪菜 |
| | 三ヶ尻　祐紀 |
| | 小野原　貴之 |
| | 髙橋　晴美（教諭） |
| | 南崎　正任（教諭） |
| 宮崎日大高校 | 寺原　綜士 |
| | 後田　望来 |
| | 黒木　裕介 |
| | 大石　佳奈美 |
| | 蛯原　恭一（教諭） |
| 宮崎大宮高校 | 樋渡　海 |
| | 松原　圭祐 |
| | 仁田脇　麻衣 |
| | 松澤　美也 |
| | 石橋　里彩 |
| | 佐野　友香 |
| | 串間　拓海 |
| | 河合　瑞穂 |
| | 大野　詩織 |
| | 後藤　百香 |
| | 田原　碧 |
| | 原　茉莉菜 |
| | 月田　明子（教諭） |
| 飯野高校 | 伊福　江利子 |
| | 小牟田　啓子 |
| | 春山　華穂 |
| | 櫻井　美咲 |
| | 岡元　薫（教諭） |
| 宮崎公立大学 | 辻　利則（教授） |
| | 稲森　美勇士 |
| | 前森　祐子 |
| | 長友　優実 |
| | 川西　理佳 |
| | 前田　将大 |
| | 藤本　真里 |
| | 日野　葵 |
| | 桐原　まゆこ |
| 一般 | 遠藤　洋希 |
| | 小牟田　ゆう |
| | 永山　由美好 |
| | 新名　典忠 |
| | 生駒　新一郎 |
| | 出水　和子 |
| ファシリテーター | 古川　秀幸 |
| | 石川　世太 |
| | 石川　咲子 |
| | 関　美穂子 |
| | 吉野　さくら |
| NPOMESC | 亀澤　克憲（編集） |
| | 村上　啓一 |
| | 武石　秀男 |
| | 久保田　博道 |
| | 吉行　秀男 |

# あとがき

NPO 法人みやざき教育支援協議会　代表　亀澤克憲

平成 26 年度宮崎公立大学ネットワーク演習ゼミの卒業論文発表会を聞きに行きました。

「ぴ～すけハイスクール」に関わった二人のゼミ生、前森祐子さんの「災害史を活用した地域防災の強化」と、稲森美勇士さんの「宮崎県内の高校生の防災意識と共助」の発表もありました。

前森さんの論文は、2011 年東日本大震災において、「過去に起きた災害体験からの教訓が風化し、生かしきれなかった」ことに目を向け、過去の経験や先人の知恵に学ぶことの重要性をまとめたものでした。東北地方や宮崎県の災害史を繙き、また宮崎県の沿岸部で起こりやすい液状化現象を調べ、それらを防災教育に生かすことで地域防災の強化を図れないかというものでした。防災教育に「地域の災害史」を位置づけることがとても大事だと指摘されていました。

稲森さんの論文は、災害時における「共助」を意識したものでした。宮崎県でも過疎化や少子高齢化が進行し、人間関係も希薄になっています。特に若者の地域行事への参加が少なく、共助が育ち難い理由をアンケート調査に基づき明らかにしたいというものでした。地域の特徴や災害体験が共助意識に与える影響は少ないという結果でしたが、聞き書きやワールド・カフェに参加した高校生は共助意識が高いことも指摘されていました。

いずれも「ぴ～すけハイスクール」の意義を評価するものでしたが、参加校がまだ少なく、聞き書きそのものの研修や体験が不足していることに加え、取材先の掘り起こしや顧問の先生方の多忙化で、活動のための時間確保がなかなか難しいことも事実です。

しかし、この高校生による聞き書きは「災害文化の伝承」という面を持っており、今後、貴重な資料になっていくはずです。歴史と体験に学び、災害時をイメージし、語り合い、高齢者や障がい者に寄り添って、ふれあいを楽しむことは難しいことではありません。むしろ、他からは得られない喜びとなるものです。その喜びは防災というテーマを超えて、地域や社会に目を向ける大きなモチベーションになるでしょう。若いうちにどれだけその喜びを体験するかです。その機会をこれからも作っていきたいと考えています。

今回、参加し、また協力いただいた多くのみなさまに心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

★★★
2014 年度 ぴ～すけハイスクール
語り継ぐ災害体験－高校生による聞き書き地域防災－

2015 年 3 月 30 日　発行

発行所　宮崎公立大学ネットワーク研究室
〒880-8520 宮崎市船塚 1 丁目 1 番地 2 号(617 号)
TEL/FAX 0985-20-4855

印刷所　有限会社　宮崎相互印刷

製本所　梶本製本